

郷土博物館・文学館だより



2月15日に行われた展示解説

特別展

「渋谷の東京オリンピック と丹下健三」

1964年に開催された東京オリンピックとパラリンピックは、渋谷を中心的な舞台として開催され、選手村や国立代々木競技場、渋谷公会堂などが建設されました。そして約半世紀経った今年再び東京オリンピック・パラリンピックが開催されるにあたり、今大会でも会場となる国立代々木競技場にスポットをあてた展示です。会期は、3月22日までです。

展示資料としては、これまでほとんど一般に公開されてこなかった建設中の国立代々木競技場の写真や動画、図面などの他、今回初公開となる丹下健三のデザイン画などが展示されています。展示は国立代々木競技場の建設地についてや建築工程、完成後今日までどのように活用されて来たかについても展示しています。さらに設計者の丹下健三についての展示もあります。

地上3階を走る「地下鉄」

渋谷駅周辺再開発の一環として、今年の1月3日、東京メトロ銀座線の新しい渋谷駅が完成しました。ホームの位置は従来よりも130m東に移動して、列車は明治通りの真上から発着することになりました。そして島式のホームを採用したことにより上下線が同じホームで乗降できるようになりました。また、渋谷に到着した電車は、以前のようにいったん車庫に入ることもなく、そのまま折返し運転を行っています。

しかし、変わらないのは、駅の3階から列車が発着することです。現在、外からは見えにくくなりましたが、かつての3階を走りぬける「地下鉄」の様子は、渋谷駅の代表的な風景でもありました。それでは渋谷を走った最初の地下鉄の歴史をひもといてみましょう。

昭和2年(1927)、日本で最初の地下鉄である東京地下鉄道が、「東洋唯一の地下鉄道」として上野・浅草間に開通し、9年には新橋まで全通しました。一方、同じ年に東京高速鉄道という鉄道会社が設立され、新たに東京市内を走る地下鉄の路線が計画されました。建設工事の認可を受けた東京高速鉄道は、10年10月18日から工事に着手します。そして13年11月18日に虎ノ門・青山六丁目(現表参道)、12月20日に青山六丁目・渋谷間が開通し、渋谷に初めて地下鉄が走ることになりました。そして翌年1月15日の新橋・虎ノ門間の開通によって、渋谷・新橋間が全通しました。

深い谷底にある渋谷駅では、地下に駅を作ることが困難であり、一方、地上1・2階にはすでに山手線をはじめとする鉄道が走ってしまし

た。そのため、青山通りの下を走ってきた地下鉄は、宮益坂の南脇で地下から顔を出すと、すぐに高架を渡って、当時工事中だった玉電ビルの3階に乗り入れることになりました。

ところで、すでに新橋まで地下鉄を開通させていた東京地下鉄道と東京高速鉄道との間には直通運転の協定が結ばれていました。しかし、両者の間に軌轍があったため、実際に直通運転が始まったのは8カ月後の14年9月1日でした。このときから、現在に通じる渋谷・浅草間の営業運転が始まります。

二つの会社によって運行されていた地下鉄ですが、戦時色が強まる中で大きな転機を迎えます。昭和13年に陸上交通事業調整法が施行され、それにより16年、特殊法人である帝都高速度交通営団が設立されました。その結果、東京地下鉄道・東京高速鉄道は営団に譲渡され、経営統合が行われました。

この路線が銀座線と名づけられたのは、戦後の28年になってからです。3階を走る「地下鉄」は昔も今も、銀座をはじめとする都心の要所と渋谷とを結ぶ大動脈となっています。



昨年12月27日、運用最終日の旧ホーム



オリンピックを描いた文学者

昭和39年(1964)10月10日から24日までの15日間、東京で第18回オリンピック競技大会が開催されました。渋谷区では東京都体育館、代々木競技場第一・第二体育館、渋谷公会堂を会場に、体操や重量挙げなどの競技が行なわれています。当時はアジア地域初の開催、過去最多の出場国ということもあってか、文学者たちもオリンピックに注目していたようです。『東京オリンピック 文学者の見た世紀の祭典』には、当時オリンピックを観戦した44名の文学者による随筆と詩が収録されています。

柴田錬三郎は公会堂で行なわれた重量挙げにおいて、選手が見せた精神統一の様子を剣豪の修行と重ね合わせて記しています。曾野綾子は水泳競技の会場となった代々木競技場を「神宮の森に、突然変異でできた二つの巨大な貝がらのような屋内総合競技場は、大理石の白い手すり、銀色の天井、青いゆらめく水、赤い役員用のイスという、あざやかな色の燃え上がりの中で、無数の砂粒のような観衆をのんでいる。」と描写し、決勝戦が始まる直前の会場を色彩豊かに表現しています。三島由紀夫は東京都体育館で行なわれた体操競技について「手を逆に持ちかえるときに、掌にいっぱいまぶしたすべりどめの粉がパッと散る。それは人体が描く虚空の花の花粉である。(中略)人体が白い鉄のように大きくひらき、空中から飛んできて、白い蝶みだいに羽根を立てて休み……」と、演技の一瞬をあたかも一枚の写真のように表しています。

三島は当時、新聞社の特派員としてオリンピック取材していました。本書に計91編収録された作品のうち、11編は三島によるものとなっています。

文学者たちの視線は選手や競技に留まりません。例えば阿川弘之は自身が取材した選手村について、同地が代々木練兵場、ワシントンハイツと変化していった歴史を回想し、その歩みに感慨を覚えています。記録映画班として参加した安岡章太郎は、撮影スタッフの仕事ぶりから日本人の職人的気質を再認識します。一方で日本人の国際感覚を当時の世界情勢と照らし合わせた武田泰淳や、オリンピックに付随する国家主義に言及した小田実による随筆もあり、祭典の華やかな一面だけ記録することを良しとしない、文学者の冷静な眼差しを垣間見ることができます。

今年の7月には2回目となる東京オリンピック・パラリンピックが開催されます。渋谷区内では東京都体育館で卓球(オリ・パラ)が、代々木競技場でハンドボール・パラバドミントン・車いすラグビーが行われる予定です。今回はどのような物語が生まれ、記録されるのでしょうか。

東京オリンピック
文学者の見た世紀の祭典 講談社編



『東京オリンピック
文学者の見た世紀の祭典』
講談社 昭和39年(1964)

収蔵資料紹介

貝化石「トウキョウホタテ」



殻長 6. 2cm
殻高 5. 9cm

今回紹介する資料は、イタヤガイ科の二枚貝の化石です。トウキョウホタテと呼ばれています。この貝は鮮新世後期から更新世（洪積世）前後に栄え、現在は生息していない絶滅種です。本州から九州に広く分布し、各地の地層や海底からも見つかるそうです。この貝化石の名前には「トウキョウ」がつけられています。これは東京都北区の王子駅付近に露出していた、貝化石層の標本に基づいて命名されました。

この貝の主な特徴は、まず二枚貝であること、そして殻が扇形をしていることです。右殻はすこし膨らみ、広く平たい約八本の低い放射肋（ろく）があります。左殻は膨らみが弱く、八本の鋭い放射肋（りょう）があるのも特徴です。写真の貝化石は、地下二mの地層から出土したものです。約一三万年前のものと同定さ

れています。昭和四六年（一九七二）、JR原宿駅の手すへそばにある神宮橋の下では、地下鉄千代田線の工事の真ん中で、ちょうど更新世の貝化石を多く含む東京層を掘っていました。そのためたくさん種類の貝化石が出て、トウキョウホタテはその中の一つでした。

またこの工事中には、ビッグなニュースも生まれました。ほぼ一頭分のナウマン象の化石が出土したのです。このニュースは、新聞にも掲載され当時話題となりました。

五月一〇日は「地質の日」です。平成二八年（二〇一六）のこの日、日本地質学会は、郷土への愛着と大地の性質や成り立ちへの関心をもっと持ってもらうために、全国四七都道府県の石（岩石・鉱物・化石）を選定しました。東京都の化石として選ばれたのは、まさにこの「トウキョウホタテ」でした。

【今後の展示予定】

◆企画展 「第20回渋谷現代短歌入選作品」
令和2年4月1日（水）～4月12日（日）
第20回渋谷現代短歌の優秀作品を展示します。

◆写真展「昭和30年代の渋谷」
令和2年4月18日（土）～6月14日（日）
東京オリンピックの開催によって大きく変わった昭和30年代の渋谷の街並みの写真を紹介します。

【開館時間変更のお知らせ】

令和2年4月より、毎週金曜日は11時～19時、毎週土曜日は9時～17時となります。

白根記念 渋谷区郷土博物館・文学館 SHIBUYA FOLK AND LITERARY SHIRANE MEMORIAL MUSEUM

開館時間 ◀ 11:00～17:00（入館は16:30まで）

休館日 ◆ 月曜日（休日の場合はその直後の平日）・年末年始

入館料 ◆ 一般:100円(80円) / 小中学生:50円(40円)

※ 内は10名以上の団体料金

※ 60歳以上の方 障害のある方と付き添いの方は無料

お問合わせ ◆ 東京都渋谷区東4丁目9-1 TEL:03-3486-2791

郷土博物館・文学館だより vol.43
令和2年3月10日発行